

# とうきょうすくわくプログラム活動報告書

施設名	太陽の子巣鴨駅前保育園
施設所在地	豊島区巣鴨1-14-8中野ビル2・3階
法人名	HITOWAキッズライフ株式会社

## 1. 活動のテーマ

<テーマ>

「つくる」― “触れる・知る・感じる”を通して「作る芽」を育てる

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)

今年の子どもの様子を見ていた時にお家遊びや家庭での遊びの経験少なく、物に自分から触れたり、動かしてみるなどの姿が入園時からあまり見られなかった。そこで日常生活や遊びの中で“触れる・知る・感じる”体験を積み重ね、自分の手の動きや感覚を通して「何かを生み出す」喜びを感じられるようにする。最終的には、これまで培った力を活かして“自分で作る・構成する”遊びへと発展できるように今年度このテーマで活動していきたいと考えた。

## 2.活動スケジュール

4～6月：「素材に出会う・触れて知る」

- ・布（タオル・ガーゼ・フェルトなど）を触る・くぐる・引っ張る
- ・手づかみ食べで食材の感触を味わう

保育者の関り：室内の玩具やコーナに上記記載の材料等を設定し子どもたちの興味関心を探る。

7～8月：「温度・色の変化を感じる」

- ・水・氷の冷たさを感じる
- ・手や足に絵の具をつけてペタペタスタンプ

保育者の関り：乳児保育における豊島区の研修に参加し、環境設定のポイントを学ぶ

9～10月：「色と形を作る」

- ・手形・足形スタンプ、スポンジ・ローラー遊び
- ・透明袋の中でまぜまぜ色あそび（2色の絵の具を混ぜて色が変わる様子を体験）

保育者の関わり：半年間の子ども達の学び・興味・関心などを担任間で評価し環境設定の見直しを図る。

11月～12月：「形を作る・変化を楽しむ/音を感じる・音をつくる」

- ・クレヨンでぐるぐる描き・なぐり描き

保育者の関り：玩具遊びに向けてリトミックや音楽遊びへの興味関心を高めていく。楽器の購入

「音を作る」

- ・太鼓・鈴・カスタネット・タンバリンなどの楽器あそび

1～3月：「光・影・空間を作る」

- ・セロファンで色と光を探究
- ・色セロファンの光あそび（透かす・重ねる・光を通す）
- ・布でトンネル・小部屋づくり

「培った力で小さなお家を作る」

- ・布を使って“小さなお家”や“隠れ家”を作る
- ・中に入ってごっこ遊びやくつろぎ遊びを展開

ねらい：これまでに培った手の動き・感覚・構成力を用いて“自分で作る・空間を構成する”遊びへ発展する／作った空間で遊びを展開し、次の発達（模倣・構成・ごっこ）への芽を育てる

\*保育者の関り：環境改善状況の子どもの変化の確認。活動のまとめを行う

### 3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

アイテム名使用時期
■ 購入品 ■
感覚音あそびセット (12月)
アイテム名使用時期
太鼓 (小型) 12月
ミュージックポンプ 12月
鈴・タンバリン12月
☆園内に乳児が扱いやすい楽器がなかったので今回購入した。
■ 消耗品、素材
アイテム名使用時期
クレヨン (太軸) 11月
ローラー・スポンジスタンプ9~10月
セロファン (大判) 11月
透明ジップ袋 (Lサイズ) 9~10月
アイテム名使用時期
絵の具 (赤・青・黄) 通年 (特に7~10月)
模造紙・クラフト紙通年 (表現活動時)
布素材 (タオル・ガーゼ・フェルト) 4~6月、1~3月
テープ類 (布・養生) 通年

### 4. 探究活動の実践

< 活動の内容 >

①0歳児の発達段階に適した環境を学び、現状の発達段階を観察した上で、年間スケジュールを設定する。
②それぞれの発達段階に応じた素材や環境を用意する。その用意した環境に対して表情や反応、指さし等の身振りがどの環境で表出されたかを観察する。
③観察により感じられた興味関心をもとにさらに活動内容を精査し、子どもたちがより豊かな体験が出来るように発達を踏まえ更なる環境を展開していく。
④成長により子どもたちが物に対して主体的働きかけるようになり、そこで芽生えたこうしてみたい、やってみたいを実現できるようにさらに援助したり、教材などを加え探究心を引き出してくる。

< 活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり >

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

4~6月 [布などの素材との出会い]
ガーゼ等肌触りの良いもので「いないいないばあ」などの遊びや歌遊び・ふれあい遊び等を行う。
最初は見たことも無い物に大して、慎重に触れる子・怖がる子・積極的に触れる子とそれぞれの反応の違いが見られる。
保育者が「いないいないばあ」をするとニコニコと笑顔になり、楽しいのだと分かると、触れていなかった子どもたちも触れ初め、口腔探索をしてみたり、顔を布にくしゅくしゅと触れさせて見たり探索が開始された。そこから、ボールのつるつるとした感触の物であったり様々な素材に触れる回数を増やしていき
口腔探索が主だった所から保育者との関わりを通じて遊びの芽が育ち子ども自身で物を操作し遊ぶようになる。
7月から8月 [温度や色の変化を感じる]
水遊び・氷遊び等おこなう。感触を手で感じていたところから氷を頬につけてみたり、自分の体のあちこちに自ら触れさせ温度や溶ける感覚を味わっていた。また手で氷に触れたとき片手で最初つかんでいたが、滑ったりつかみにくさを感じて子どもたち自信がじゅくじゅくと氷に向かって両手でつかんだ方がつかみやすいということを自ら気づき獲得していた。
9~11月
[色や形を作る]
氷あそび以降様々な感触に慣れ始める。テープ剥がしの粘着面なども気にせず自分から触れるようになった。テープはがしで最初は白色のテープで行う。子どもたちテープという存在に興味を示していたが、色テープを加えると選ぶ色に個性が見られる。さらには似た配色の絵の具を用意し手で触れフィンガーペインティングを行なうと、テープで選んでいた色と同じような色を選んで触れていた。夏の間にも様々な感触を経験したことで絵の具も自分から触れる姿が見られた。絵の具のついた指を自由に動かし画用紙を移し「描く」ことを実施。点や線が描かれると形が変わる事に興味関心を寄せ自ら描こうとする姿勢が見られた
9月~保育者が作った作り玩具(鈴)を遊びの環境に加える。保育者が口づさむ歌に合わせて振ったりしながら遊び楽しむ。
11月~
たんば→10月から「描く」事を経験した子ども達と共に絵の具を使ったスタンプ遊びを環境として設定する。子ども達はすぐに興味を示し自分からやってみたいという意思を示していた。スタンプで形が紙に映し出されると「ん!ん!」と指さしをしながら目を輝かせる。「もっとやってみる?」などと保育者が声を掛けるともう一回と指を指し保育者に伝えていた。
複数回実践をすると、道具を使いこなし描くことを前回よりものびのびと描くことを楽しんだ。
12月~「音との感じる・音を作る」
リトミックを実践していく中で手を叩いたり、しながら音を楽しむ姿も出てきた。玩具のひとつに鈴を以前から加えていた事で手遊びやリトミックの曲に合わせて鈴を振って楽しむ様子が見られていた為
更に楽器(太鼓・タンバリン・ミュージックポンプ)を遊びの環境に加えた。
使い方を遊びの中で知らせていくと自由に打ち鳴らしらり、振ってみたり、鳴らしてみるなどして楽しみ始めた。以前より保育者の歌う歌に合わせて鈴などを鳴らしていたので、楽器が加わってもそれぞれを上手く使い音や音楽を体を使いながら楽しんでいる。また子ども達なりに叩き方やリズムを変化させたり、工夫しようとする様子も出てきている。この教材を加えた事でミュージックポンプを持ってはいはい自分が動く音が鳴ることを自ら発見した子も見られ始める。更には太鼓のばちで床を打って太鼓との音の違いを見つけるなど、音を探究する様子が出てきている。



## 5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

最初は受動的だった子どもたちの姿がこれらの取り組みによって自分たちの手で物を扱い、動かすことが出来るようになった喜びを見出すと共に遊びを介して子どもたち自身の諸機能の発達していった。

布や氷といった多様な素材に触れる経験は、単なる感覚刺激に留まらなかった。例えば氷遊びでは、当初はその冷たさや滑りやすさを確認する。手の熱で解けて手から滑り落ちたり、溶けて小さくなっていく過程に気が付いたり素材に繰り返し触れてその変化を見届けようとする「探究」の姿へと進化していった。こうした感覚体験の積み重ねが、後の表現活動における主体性を支える基盤となったように感じた。特に絵の具遊び（フィンガーペインティング）においては、その探究過程が顕著に現れた。当初、手形足型から始まった絵の具遊び、絵の具の感触が初めての感覚であったためめらったり、不思議さから手足を握ったり開いたりして確かめ、探索している様子が見られた。フィンガーペインティングでは指先で絵の具を動かし、点や線が生まれた事に強い関心を示していた。「自分の動きによって形が変わる」という因果関係を実感したことで、色を重ねて混色を楽しんだり、指の力の入れ具合で点の大きさを変えたりと、意図を持って変化を試みる「探究」へと遊びが深まっていく様子が観察された。これらの表現活動において「自分の思いを形にする」という表現の喜びを大きく膨らませたことによって、現在ブロックや楽器等子どもたち自身で試行錯誤を繰り返し遊びを広げる姿が見られ、少しずつ探究心の芽生えが随所に感じられる。今年度は室内環境における探究活動が主だったが、今後は自然物などの多様な素材を取り入れ、子どもたちの「知りたい、試したい」という探究心をより多角的に引き出していきたい。